

2025年12月7日 説教「時代を見分ける」

ルカの福音書 12章 54~59節

12章においては、既に主の再臨を待つ信仰について、忠実な賢い管理人のたとえを通して、教えられてきました。ここに再度、その課題について語られることになります。

1. 事実そのように (54~55節)

①西に雲が起こると (54) 「群衆にもこう言われた。『あなたがたは、西に雲が起こるのを見るとすぐに《にわか雨が来るぞ》と言い、事実そのようになります。』」

弟子達に語っていたイエスは、群衆にも教えられます。多くの人は、西に雲が起こるのを見ると、にわか雨が来る、といった天気の予報をし、すると実際にわか雨が降ると述べられました。これは貴重な当時の気象情報です。こうした情報は、言い伝えられた知恵であり、その時代に生きていた人達の常識でもあったのでしょうか。とはいえ、あのガリラヤ湖でイエスと舟に乗っていた弟子達の数人は漁師でありながら、大暴風が来ることを予知できなかったように、地中海から山越えでやってくる風は突然にやってきたようです。

②南風が吹き出すと (55) 「『また南風が吹き出すと、《暑い日になるぞ》と言い、事実そのようになります。』」

天気の予報に関する話しが続きます。「南風が吹き出すと、暑い日になるというのもそうだったようで、事実そのようになっていくことが多かったと伝えられます。いずれにせよ、人々は先の天気について見通すことは日常的にやっているということを、イエスは言わんとしているわけです。

2. なぜ自分から進んで (56~57節)

①今の時代を見分ける (56) 「偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。」

ここでは一般的の者たちに、イエスは「偽善者たちよ」と手厳しい言い方をされています。マタイ 23章にしばしば出てくるように、律法学者やパリサイ人に向かってそのように言われるることは多くても、一般の人々に「偽善者たちよ」と言われるることはめずらしいです。それだけ、よく聞くようにと注意を促しているのでしょうか。「あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうしてこの時代を見分けることができないのですか」とイエスは言されました。生活するにあたっての知恵は持ち合わせていても、さらに肝心なことを見分けることができていないと言われるのです。それは「時代を見分ける」ということでした。これはイエスの時代におかれている者はもちろん、現代におかれている者にも向けられたお言葉です。

②何が正しいかを (57) 「『また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか』」

それでは 56 節にある「この時代」とは何なのでしょう。それを見分けるために、イエスは正しい判断ができるように、進んで努めるようにと促されているのです。それには、天気予報のような知恵が必要なのですが、58 節以下のたとえ話を通しても、その際の心構えが示されています。

3. 和解するように努める (58~59 節)

①告訴する者と (58) 「『あなたがたを告訴する者といっしょに役人の前に行くときは、途中でも、熱心に彼と和解するように努めなさい。』」

たとえ話は、そこにいる誰かが告訴されているという前提です。そして、告訴人に、役人のところに連れて行かれようとしている最中だというのです。その際には、告訴人に対して、なんとか告訴を取り下げるよう、熱心に願えといいます。何があったのかという中身までは述べられていませんが、相手は相当の勢いで裁きをしてもらおうとしているのです。だからこそ、告訴されている者は、自分の至らなかった点について、認めるべき点は認め、赦してもらい和解しなさいといいます。

②裁判官のもとに (58) 「『そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行きます。裁判官は執行人に引き渡し、执行人は牢に投げ込んでしまいます。』」

そうしないとどうなるでしょう。告訴人はあなたを裁判官の所まで連れて行くでしょう。その上で、あなたはそれ相当の裁きを受けることでしょう。そして、裁判官はその具体的罰をなすために、あなたを执行人に引き渡すというのです。命ぜられた执行人は、裁判から言われるがまま、あなたを引っ立てて、牢獄に投げ込むことになるといいます。

③最後の一レプタまで (59) 「『あなたに言います。最後の一レプタを支払うまでは、そこから決して出られないのです。』」

そして、牢獄に入れられたあなたは、罰金を払うしかないので。ある面では、罰金で済むだけのように思えますが、その支払いについては、決して容赦はないのです。最後の一レプタを払うまで、牢から出ることはできないといいます。レプタというのは最小の単位の銅貨です。あの貧しいやもめが精一杯の献金をした(マルコ 12:41 以下)というのもので、一デナリの 128 分の一に相当します。でもそんなわずかだけ足りなくとも、支払わなければ出られないということです。そこにはおまけはないのです。

《展開と結論》今朝の聖書箇所には、キリストの再臨に関することと、それに伴う心構えについて述べられています。

今日、天気予報というのは、コンピューターの解析によって、かなり緻密で合理的なものになっています。そして、天気予報はニュース番組などにおいて、それなりの時間を割いて行われています。それは多くの人々が天気に関心があるからです。実際のところ、仕事や生活において、天気の動向は非常に気にかかることがあります。主婦の方は洗濯物を干すということから気になるでしょう。私どもも、日曜日の天候については、気にかけます。一方、政治情勢、国際情勢なども関心が向けられますが、これらを聖書的に考えることはあるでしょうか。イエス・キリストは言われました。「わたしを名のる者が大ぜい現れ、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、あわてないようにしなさい。これらは必ず起ることです。しかし、終わりが来たのではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。人々はあなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときには、人々が大勢つまずき、互いに裏切り、憎み合います。にせ預言者が多く起って、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御国に福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから終わりの日がきます」(マタイ 24:4~14)。長く引用しましたが、ここに終わりの日の前兆が記されています。これらを読むと、今日多くの終わりの日の前兆と言われた出来事が、目の前に起きています。核がちらつく国際関係、異常気象、飢餓に瀕する人々の問題等々、たくさんの現実がありますが、それらを現代の問題としてとらえつつ、さらに主の再臨を見据える視点をしっかりと持ちたいのです。

それとともに、主の再臨を意識する者は、私達は告訴する方のことを忘れてはいけません。罪を認め、何とか赦していただけるように、悔改めいかねばなりません。そうでなければ、このたとえ話にあるように、裁判官によって裁かれ、牢獄にいれられてしまうのです。その罪という負債の支払いについては、最後まで問われることになるのです。そうです。それは最後の審判です。それは最後の一レプタを支払うままであるように、私たち自身では到底支払うことができないのです。そうならないためにも、間に入ってくれる方に弁護をお願いして、罪を責める方に赦しを請い、和解していただきましょう。十字架の主が、とりなしして下さっているのですから、その方の前に出ていきたいのです。まだ間にあります。「今は恵みの時、今は救いの日です。」(第二コリント 6:2)。信仰を持つ者もまだ信仰告白していない者も、今こそ聖なる神の前に悔改めていきましょう。

折りしも、アドベントの時です。救い主を待ち望みつつ、この方がとりなしのためにお生まれくださることを喜びつつ、悔改めていきましょう。